

保育者養成校に在籍する男子学生の進路選択の実態と キャリア支援についての検討

三田 侑希 小島 好美

A Study of the Career Choices and Career Support of Male Students Enrolled in a Childcare Worker Training School

MITA yuki KOJIMA Yoshimi

【キーワード】保育者養成、男子学生、進路選択・キャリア支援

1. 問題と目的

1926年に保姆資格が法定化され、保姆の養成が制度化されたのは1948年である。当時、保姆資格は女子のみに規定されており、男性が保育者として認められるようになったのは1977年の児童福祉法改正からである。また、その当時は「保父」という通称で呼ばれ、1999年の男女雇用均等法改正に合わせ、資格名称が「保姆」から「保育士」に統一され、男女問わず保育者として勤務が可能となった。保育者養成においても男子学生受け入れ及び共学化の進む昨今、養成校の現状としては、近隣の幼稚園・保育所など実習や就職にかかわる施設への周知、実習や就職の受け入れ態勢などが整っているか等のより現実的な整備体制をとっている現状がある。保育者養成校における男子学生の在席率（男子の割合）について2026年現在、国や教育機関が出している統計として公表された正確な全国データは見当たらないが、厚生労働省が作成しこども家庭庁が所管する「保育士登録者数等（男女別）」統計によると2024（令和6）年時点での保育士登録者数は男性98,676人、女性1,799,343人と圧倒的に男性登録者数は低いことが分かる。

表1 保育士登録者数（男女別） こども家庭庁HPより引用:<https://www.cfa.go.jp/policies/hoiku>:

保育士登録者数等（男女別）

	登録者累計			(参考) 取消者累計		
	男	女	計	男	女	計
令和6年4月1日	98,676	1,799,343	1,898,019	118	91	209
令和5年4月1日	94,462	1,748,032	1,842,494	103	81	184
令和4年4月1日	90,148	1,691,092	1,781,240	90	74	164
令和3年4月1日	86,207	1,636,472	1,722,679	80	66	146
令和2年4月1日	82,330	1,583,219	1,665,549	67	60	127
平成31年4月1日	78,080	1,520,476	1,598,556	53	54	107
平成30年4月1日	73,576	1,457,296	1,530,872	46	53	99
平成29年4月1日	68,976	1,390,882	1,459,858	41	49	90
平成28年4月1日	63,837	1,321,840	1,385,677	38	45	83
平成27年4月1日	59,018	1,253,223	1,312,241	28	38	66
平成26年4月1日	54,423	1,191,929	1,246,352	24	30	54

※各都道府県から登録事務を委託されている登録事務処理センターより、こども家庭庁（令和4年4月1日分までは厚生労働省）が聞き取りの上作成。
※取消者累計とは、児童福祉法18条の19に基づき、都道府県が登録を取り消した数。

2024（令和6）年4月時点の保育士登録の男女比は男性保育士5.2%に対し女性保育士94.8%である。男性保育士の保育現場での活躍は広がりつつあるものの、データを見ると女性が大半を占める現状がある。

保育者養成校で保育士資格を取得する場合、保育実習Ⅰで保育所実習と施設実習両方を行った上で、保育所実習である保育実習Ⅱまたは児童館をはじめとした児童福祉施設・社会福祉施設が対象となる保育実習Ⅲを経験し、単位取得をもって保育士資格取得となる。学生たちは、保育士＝保育所で働くというイメージが強く、入学後は社会的養護施設や障害者支援施設等での実習があり、戸惑いを感じる学生も少なくない。入学当初は保育所や幼稚園・認定こども園での就労を検討していたものの、養成校での座学や実習を通じて将来の展望が変化し、入学時とは異なる進路選択をする学生も一定数存在する。

栗原・蓮井・片山（2024）は、男性保育者に関するこれまでの研究をレビューしている。保育者養成校における男子学生に関する研究について、彼らの受け入れは徐々に増えてきているものの、依然として稀有な存在である現状を捉え、男性保育者養成における課題の明確化、及び今後の養成カリキュラムについての検討を目的とする研究が検出されたことを明らかにした。近年、ジェンダー平等や性別にとらわれない働き方が社会的に推奨され誰もが働きやすい環境、働くことを通じた自己実現に向けた社会づくりが求められるなか、保育現場においては女性が大半を占めている。こうした状況下で、保育者養成校に在籍する男子学生たちはどのように卒業後のキャリアを選択するのか。本稿では、保育者養成校における男子学生のキャリア選択の過程に焦点を当て、彼らがどのような道筋で卒業後の進路を選んでいくのか調査しキャリア支援の在り方を検討することを目的とする。

2. 調査対象者と方法

調査対象者は関東圏X短期大学幼児教育学科に在籍する2年生男子学生8名、実施時期は2025年12月である。

男子学生のキャリア選択について個性性を重視した調査を進めるため、全8問で構成される自由記述式の質問紙調査を実施した。アンケート調査実施ツールには学生が日常的に講義のリアクションペーパーなどで回答しているGoogle formsを採用した。

3. 倫理的配慮

本研究は本学に在籍している男子学生を対象としている。協力は任意であり、協力の可否によって、成績など学生生活上で有利・不利益になることはないこと、収集したデータは、研究目的以外に用いず、論文や学会等で公表すること、個人情報の取り扱いについては書面で説明を行い実施した。アンケートの記入をもって研究への同意が得られたと判断することを伝え回答のあったデータを対象としている。個人を特定できるような情報やイニシャルや種別は記載していない。

4. 結果

保育者養成校における男子学生のキャリア選択について、自由記述式のアンケートからは次のような結果が得られた。

質問1『高校卒業後の進路選択で保育者養成校を選んだ理由について教えてください』の回答

では、「子どもと関わる仕事がしたい」「友人や親戚など近い関係の人が保育関係の仕事に従事している」など、保育者・幼稚園教諭を目指すというよりは、子どもに関係する仕事という漠然とした理由で選択している内容が捉えられた。

表2 質問1の回答内容

(高校卒業後すぐに)就職はしたくなかった
いところに通っていた学校で気になったから
先生に進められたから
自分のやりたいことやしたいことに通じていたから
小さい頃からいところ近所の子の面倒を見ていたから
保育士になりたいと思い共学になったから
小さい頃から、子どもが好きで、入学までに経験を積み、職場体験や選択授業を通して、子どもと関わることに関心を持ちました。そして、自分自身が幼稚園生の頃、憧れの先生のようになりたく、保育者養成校を選びました。また、家から比較的通いやすく、自分が入学するタイミングでの男女共学となる今の短期大学が良いと思い、決めました。また、幼稚園教諭二種免許状、保育士資格の2つ取得できるのも良いと思い、そこにも魅力を感じました。
元々子どもが好きで、子どもと関わる仕事に就きたいと思ったから
高校の時に知り合いの保育者からこども園での学童のアルバイトに来ないかと誘われ、その園でアルバイトをしたところ、子どもと関わる事や保育に携わる事の楽しさを知り、保育者になろうと思った事が保育者養成校を選んだ理由です。

質問2『入学時点で短大卒業後の就職をどのように考えていましたか』については、幼稚園教諭や保育士を目指すという回答が過半数を占めていた。

表3 質問2 回答内容

入ってから決めようと思っていた
保育士になりたいと思っていた
子ども向けの企業に入りたいと考えていた
幼稚園教諭
保育士になりたい
入学時点では、自分が幼少期に通っていたこども園(当時幼稚園)に就職することが1番の目標でした。小さい頃から憧れの園で、母園に恩返しをしたい、そんな想いから入学に至りました。その想いから、実習でも「幼児教育体験活動」、「教育実習」、「保育実習Ⅱ」と母園に計3回実習でお世話になりました。
保育所保育士になりたい
高校の時にアルバイトをさせていただいていた園にそのまま就職しようと考えていました。就職させていただいた際には学童員をしながら日中に保育をするという形が良いと思っていました。

質問3『入学時点での就職希望先(保育園や幼稚園で働きたいなど)は、短大の授業や実習を経験してきた今、変化していますか?』への回答は「はい」が50%、「いいえ」が50%と二分された。

質問4『「はい(変化した)」「いいえ(変化してない)」どちらの回答をした人もその理由(変化した理由or変化しなかった理由)を教えてください』については、実習に関する記述が多く、実習を通じてポジティブな経験をする、幼稚園教諭や保育士への意識が高まり、ネガティブな経験をする、進路選択に迷いが生じていることが分かった。

表4 質問4 回答内容

特にほかの職業に目が向かなかったから（変化してない）
大学にきた求人を見て気持ちが変わり保育で学んだことを活かしていきたいと思った（変化した）
実習や学んだ内容を通して、自分のやりたかったこと（企業への就職希望の気持ち）が変化してきたから（変化した）
実習を通してこの道が合っているのか分からなくなってしまったため（変化した）
母園に計3回実習に行きました。残りの2回の実習、「保育実習Ⅰ（保育所）」では、地元の公立の保育所、「保育実習Ⅰ（施設）」では、障害者支援施設で実習をしました。保育所実習では、自分が生まれ育った町で、なおかつ公立のため、公務員として働ける魅力を感じました。施設実習では、障害を持つ人との関わりにやり甲斐を感じ、計5回の実習を通して、「母園」「公務員保育士」「施設職員」という選択肢が増えました。（変化した）
乳児から幼児まで全体を見たいので保育所保育士になりたいです（変化してない）
アルバイトさせていただいている事もあり、その園の保育者や子ども達、保護者との人間関係が形成されていてその環境を無くしたくなかったからです。（変化してない）

※理由は無回答だが（変化してない）が1名

質問5『現時点で進路（保育所保育士、施設保育士、大学進学、一般企業就職など）を教えてください』については、アンケート回答時に内定を貰っている学生・選考途中や採用試験前の学生など、前提条件が統一されていないが、保育所等の保育施設で検討している者が4名、障害者支援施設などの社会福祉施設や保育所以外の児童福祉施設で検討している者が2名、進学が1名、保育系ではない公務員が1名となった。

質問6『その進路（5の回答内容）に決めた理由を教えてください』への回答は個性が高く、理由は様々にあり学生生活や実習を通じて良い出会いやきっかけがあったことが確認された。

表5 質問6 回答内容

園から就職しないかと声がかかったから（入学時、就職先施設は入ってから検討と考えており、卒業後は保育所保育士として勤務）
求人が来たことがきっかけでありかもと思ったから（入学時は保育士希望だったが、卒業後は地方公務員）
子どもたちと実習を行い、先生方と相談する中で自分のやりたいビジョンが見つかったから（入学時は子供向け企業就職希望だったが、卒業後は児童館等施設保育士）
他の分野のことも見てみたいと思ったため（入学後は幼稚園教諭希望だったが、卒業後は4年制大学編入）
子どもが好きだから（入学時は保育所保育士希望、卒業後は保育所保育士）
上記4に書いてあるように、「母園」「公務員保育士」「施設職員」という選択肢で、とても迷いました。入学前から目標であった「母園」は、1番の目標でした。自分は今すぐにも母園への就職活動行いたかったです。学校の先生や、保護者に相談し、今の時代、子どもが少なくなってること、また、男性である以上給料は大事。私立である母園で安定した人生が送れるのか心配の声があがりました。実際、最初に選んだ道は、「公務員保育士」でした。しかし、1次試験で落ちてしまい、選択肢が「母園」「施設職員」となりました。そこも、学校の先生に相談した所、施設なら給料もよく、どんどん昇進できると助言されました。迷いに迷った結果、8月に実習をした障害者支援施設への就職を決めました。（入学時は保育教諭希望、卒業後は施設保育士）
もともと保育所の先生になりたかったから（入学時は保育所保育士、卒業後は保育所保育士）
短大での勉強や実習での経験などを踏まえて考え、かなりいましたが、1番大きかった理由としては人間関係がそれなりに形成されていて居心地が良いという理由であると思っています。また人間関係以外にも理由はあり、保育園・幼稚園だけではなく、学童やフリースクールといった事業もしているため関わる子ども達の年齢の幅が広いという点も決めた理由としては大きいと思います。（入学時は保育教諭、卒業後は保育教諭）

質問7『短大卒業後の進路決定（進路相談や就職活動）の時に支えとなったサポートはどのような内容が教えてください』については、教職員のサポートと回答する学生の割合が高かった。

表6 質問7回答内容

自分から声をかけるのが苦手だったので先生方から声をかけて進路状況の確認をしてくれて支えになった
先生に面接練習をしていただいたことや情報を集めるのに手伝って頂いたこと
先生方との相談 実習でのアドバイス
友人や教職員との相談で決めました
教員との相談
学校の先生、友人への相談で決めました。施設職員の道を選んだ時、みんなが喜んでくれて、特に保護者が安心してた表情を見てホッとしました。ピアノが得意な自分にとって保育の道は特別な縁を感じていましたが、どの道に行ってもまわりには応援してくれる人がいて、その温かさがサポートになりました。夢である「母園」、安定である「施設職員」、これらのことをそれぞれの道に進んだときのことをより深く一緒に考えてくれたことが決め手になりました。
母親から保育士をしている人の話をされたり、先生に面接練習などをしていただいた
私が進路をどちらにしようか迷っているという折を先生に伝えた際に、両方の園の情報を調べていただきました。私が迷っていた園はアルバイトをしている園と責任実習でお世話になった園で、どちらも私に合っている園だと思っていましたが、先生が男性にはこの給料は厳しいかもしれないと助言をくださり、お互いの給料を比較してどれくらいの差があるのか等を教えていただきました。それ以外にも園の未記載の情報などを直接確認しにいく際にどんな事を聞けばいいのか？等を一緒に考えてくださりました。

質問8『保育者養成校において男性保育者を目指す学生へのサポート内容についてお聞きします。こういう支援やサポートがあったら保育職への道に進みやすい、希望がもてそうなどの内容を気が付く範囲で教えてください』では、授業内容が中心に記されており、同性同士でペアを組みたかった授業や、性別を過度に気にしている授業について記されていた。また、保育所や幼稚園・認定こども園はまだまだ女性が多い職場であるため、その中で男性保育者がどう立ち回るのがかといった現場に即した教授内容を希望する内容がみられた。

表7 質問8回答内容

授業内のペア行動で女子が多いので他は女子×女子の組み合わせでも女子×男子の組み合わせができるのが気まずい。
まだまだ女性社会ではあるけど思っているより心配しなくてもやって行けます！ 授業内での男女の交流を深めようみたいなのは少しやりずらさがあるので困った
保育の内容を恥ずかしく思わないようにするようにする授業内容
男女で自然と仲良くなるようなプログラム作り
感情を言語化するような授業
異性と気まずくなるような授業はない方がいい
授業では、男性保育者ならではの強みを活かせるよう、また、男性保育者ならではの気をつけなければいけないことを重点的に進めると保育の道についたとき、現場で活気よく活かせると思います。また、実習では、過去に男子学生を受け入れたことのある園をピックアップして、実習支援をすると良いと感じました。
異性での食べさせ合うなどはあまり良くない
本学で勉強している中で欲しかったサポートとしては、女性が主として働く職業であるのは承知していますが、扱ってくれる授業はありましたが、もっと男性保育者としての保育方法を学べる事が出来れば良いなと思いました。実際に私は実習の途中に「今まで女性の保育しか見てきてないけど、男性保育者としてどう関わるべきなんだろう？」と疑問に思ってしまった場面があったので、男性保育者のすべき関わり等をもっと学べたら良かったと思います。またグループ活動など男で固まる事が多くなりがちだった為、ランダムなグループなどにしたらより良い学びが得られたのではないかと思います。

5. 考察

保育者養成校に在籍する男子学生への自由記述による質問紙調査を実施した結果からは、保育系短期大学へ進学を決めた理由にこれまで子どもに関わる何らかの体験と自らの関心関わっていることが捉えられた。

入学直後に意識していた就職先とアンケート実施時期である卒業前の進路、内定先については、変化していた学生が50%、変化していない学生が50%という結果であった。なかでも注目したいのは、保育者養成2年間のカリキュラムにおいて、講義、演習、実習と実際の保育現場で必要となる専門性を学ぶ過程で、入学段階で考えていた進路（就職先施設等）が「幼稚園教諭」「保育士」だったという学生が、その学びの過程で4年制大学編入や地方公務員という保育系以外の進路、就職先を選んでいくという点である。

保育者養成のカリキュラムでは保育の現場に特化した高い専門性を習得するための日々を送ることになるが、そうしたなかで自身の適性や保育業界の文化的背景が自分に合っているのかという今後のキャリアに関わる思いを巡らせたのではないかとということがうかがえる。こども家庭庁（2024）「保育士登録者数（男女別）」資料（表1）にもあるように、男性保育士の登録者数は保育士全体の5.2%であるが、これは保育者養成校の男子学生が実習を経験するときの保育施設に男性保育者が働いている姿に触れることができるかという面に大きく関係するのではないだろうか。保育の仕事を目指し実習をする段階で男性保育者の姿に触れることができない場合、自分の将来像を描くことやロールモデルの存在を得ることが難しくなることが考えられる。更に日々の記録や指導案等の立案、手遊びやピアノの実践など、性別に関係なく保育学生として高いハードルが重なった場合、将来的に保育の仕事を目指そうという思いを問い直すことにもつながってくるのではないかと。こうして男性保育者の割合が低い現状がさらなるループを生じさせていることが考えられる。

この状況を鑑み、保育者養成校としてどのような支援ができるか検討していくことは重要であるだろう。手だての一つとして講義、演習でのゲストとして現場から男性保育者を招きリアルな声を届けること、キャリアガイダンス等の進路支援の一環に保育現場の管理職でない保育の第一線で働く男性保育者の存在を知らせていく取り組みが有効になると考えられる。筆者が保育士養成課程を構成する科目である「保育者論」において社会福祉法人立の保育園で働く20代男性保育士と30代男性保育士をゲストに呼びその実際の声を授業内で扱った際、授業後のリアクションペーパーでは「今回の授業を聞いて学んだことは、保育の専門性は性別を問わずいかに大事なのかを学びました。実際の保育の現場を映像で見て、一日の行動を知ることができ保育園で働くという実感が湧いてきました。保護者からのクレームがあった時は一人で抱え込まずに、園全体で共有して再発防止をすることが大事だと分かりました。また自分がずっと気になっていた保育士の給料面も男性としての将来的にその話も聞くことができ安心しました。」や「今回保育者の方からお話を聞いてとても勉強になり、自分が実習や働いている姿が想像できました。生まれも育ちも価値観も違う人同士が集まってみんなが違う意見を持っているのは当たり前という言葉が心に響きました。」や「先生方のお話は、教材のビデオ等とはまた違い、より現状に近い問題や状況を知ることが出来た（中略）考えのアップデートやすり合わせが大変だと仰っていたが、先生同士で気兼ねなく話し合いができる園が実際にあると感じ自分もこのような園で働きたいと思った。自分に合った園を探すためにも、自分の行いたいと思う保育をしっかりと持ち大切にしていけたらいいと思う。」という内容が捉えられた。男子学生はもとより女子学生も男性保育士の働

きぶりを感ずることで、将来共に働く同僚としてどのように接していくかなどを学ぶ機会となっていた。実習という保育現場での男性保育者の存在は男子学生が影響を受ける大きな存在ではあるが、現状、その存在に出会えない場合があるとすると、カリキュラム上の適切な科目においてその機会を保障していく必要があるのではないだろうか。

在学中の様々な学習内容、演習内容を通して保育という世界に触れ、子どもの育ちを支える専門性を学び、卒業後、実際にどのように働いていきたいか、自身の適性と合わせ、保育士などの取得した資格を活かしていく道、その際、幼稚園、認定こども園、保育所、施設、どのような就職先が自分には合っているのか、将来のビジョンを模索しながら、自己分析、自己理解をすすめる段階における男子学生へのキャリアサポートはどうあるべきなのだろうか。質問紙調査の質問7の回答内容に着目してみると、教員からの助言や教員との相談がその内容に含まれている割合は高いことが分かる。他、友人や母親といった身近な存在とのやり取りが卒業後の進路決定に関わっていることが明らかとなった。

教員との相談内容や助言をみていくと、給与面という具体的な数字、将来の生活を見据えたうえでの施設ごとの比較を根拠にしたアドバイスが響いているようである。また、面接練習という一人で行うことは難しく、経験者のアドバイスが必要になる内容に対して、支えとなったサポートだと感じているようである。

ここで気を付けなければならない点は、将来の生活に必要な経済的安定を重視するばかりに自身の適性や良さを学生自身が見失わないよう助言することではないだろうか。経済的な安定性に不安を抱える気持ちが湧いてくるのは変化の激しい現代社会において当然のことであるが、保育者養成校のキャリアサポートとしては、培ってきた学びをいかに社会とつながりながら生かしていくかという道を学生と共に探ることではないだろうか。質問7の回答内容からは、この点に留意した進路への助言、学生対応が不可欠になると考えることができる。

質問8においては、今後の支援内容、希望するサポートや授業内容についての回答を得た。そのなかではやはり、多感な時期にある学生たちの学習場面における配慮についての内容が読み取れた。保育実践を想定した授業（例えば離乳食介助のロールプレイなど）を男女で行うことの恥ずかしさやためらい、学ぶうえではすべきことだと理解していても、学びの前の段階で躊躇してしまい学習内容が深まらないということが推察された。この点については授業の進め方に大いに工夫が必要だろう。それは男女でグループを分けるという安易な方法ではなく、保育実践という場を想像し、実際にチームで協働して子どもを見守り支えていくというスタンスを学びの中に取り入れていかなければ、ここ生じる男女相互のためらいや、躊躇はなかなかぬぐい切れないと考えられる。重ねて男子学生は、授業を通して「これは女性保育者だから通用するのではないか」「男性が行っても大丈夫なのか」という思いを感じていることが記述内容から読み取ることができた。保育の専門性を学びながらも男性として「自分がやっても大丈夫なのだろうか」と感じてしまう状況は、保育界が「女性多数である」という教員を含むその場を構成する集団の無自覚さから生じるのではないだろうか。筆者を含めてだが、学生への教授内容、指導、キャリアサポートに当たっては男性であっても、女性であっても、ジェンダーを超え専門職として適切な内容を教授しているかという意識を常にもっておく必要があると考える。

保育者養成校における男子学生のキャリア支援については、卒業前の進路決定時のみに実施されるものではなく、入学後から将来を見据えて関わり助言を行っていく体制や、保育者養成としての教授内容のなかに性別によって学習が阻まれてしまうような内容を含まないよう努めること

が重要になってくるといえる。

6. 今後の課題

保育者養成校における男子学生の進路選択の実態とキャリア支援についての検討をすすめてきたが、今後に向けた課題として更に多くのデータを収集していき、個別具体性の高い内容と一般化できる内容の検討を進めていく必要があるだろう。また、今回は短期大学在学の男子学生への調査であったが、今後は4年制の保育者養成校在学の男子学生に向けた調査も視野に入れる必要性を今後の課題として記しておきたい。

7. 引用・参考文献

- (1) 淀川裕美・高橋翠（2016）『全国保育・幼児教育施設大規模調査結果報告』東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践センター。
- (2) 森合真一（2014）『保育政策の歴史的展開と保育士養成』近畿大学豊岡短期大学論集（11）, p1-9.
- (3) 佐藤信雄（2008）『保育制度と保育者養成課程の変遷について 保育士養成課程における『心理学』の役割を中心に II』北海道文教大学研究紀要（32）,p57-71.
- (4) 松倉佳子・江津和也（2023）『障害者施設が保育実習の施設に加えられた経緯とその意義』こども教育宝仙大学 紀要（14）,p71-80.
- (5) 栗原匡虎・蓮井和也・片山美香（2024）『男性保育者に関する研究動向と今後の展望』岡山大学教師教育開発センター紀要（14）,p373-387.
- (6) 中田奈月・前迫ゆり（2005）『男性保育士として仕事を続ける-在学生・現役男性保育士のワークショップ-』奈良佐保短期大学紀要（13）p79-94.
- (7) 本多潤子・小林育子・桜井登世子・安村清美・鈴木力・成田眞・高嶋景子・中原篤徳（2007）『保育現場に認識されている男性保育者の特徴』田園調布学園大学紀要（1）,p153-176.
- (8) 小林真・竹田誠（2008）『幼児の母親は男性保育者にどのようなイメージを抱いているのか-育児の相談相手としての可能性を探る?』富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要教育実践研究,2,p17-22.
- (9) 鈴木慎一郎（2010）『男性保育者の歌声の実態に関する研究（2009年度研究助成成果報告）』研究年報,15,134.
- (10) 鈴木慎一郎（2011）『男性保育者の歌声の実態に関する研究』研究年報,16,p69.
- (11) 安井恵子（2013）『保育者養成機関における男性保育者の養成について-卒業生にみる男性保育者の意識調査から-』滋賀短期大学研究紀要,（38）,p55-66.
- (12) 西川恵子（2018）『男性保育者のキャリアコースと心理的適応』信州豊南短期大学紀要,p38-54.
- (13) 長谷秀揮（2021）『男性保育者の現状と課題についての一考察:施設長及び男性保育者への質問紙調査から』四條畷学園短期大学紀要,p1-10.
- (14) こども家庭庁（2024）保育士登録者数（男女別）資料<https://www.cfa.go.jp/policies/hoiku>（最終閲覧2026/1/10）

謝辞

本研究にご協力いただいた全ての皆様に感謝いたします。

特に、就職活動や卒業論文の執筆など忙しい時期に、快くアンケートの回答にご協力いただいた学生の方々に心より感謝いたします。